

## 大宝寺

日本列島の西端、五島列島の南西部に位置する玉之浦は、古くから中国と日本を往来する旅人の多くが通過してきた場所である。8 世紀に創建されたとされる真言宗の寺院、大宝寺の海辺の境内には、その名残が数多く残されている。

806 年、密教を学ぶために訪れた中国から帰国した僧侶の空海（774-835）が大宝寺を訪れたという伝説がある。中国で学んだ、後に真言宗を開くきっかけとなった教えを大宝寺で説いたとされる。このため、大宝寺は空海ゆかりの地として、そして真言宗の総本山である高野山にちなんで「西の高野山」を名乗っている。

本堂の裏山にある五重塔は、1369 年に現在の福井県若狭湾の海岸で産出された石材で作られたものである。五島の商人たちは、中国で仕入れた商品を若狭湾など日本海側の港に運び、売っていたというから、石材はそうした経緯で五島に持ち込まれたと考えられる。この塔は子供の守り神として信仰され、新生児のへその緒を塔の中に納めてお祈りする習慣がある。

また、1375 年に鑄造された大宝寺の銅製の梵鐘も中国へ向かう旅人、つまり現在の兵庫県から来た僧が持ち込んだものである。東シナ海を渡る危険な旅に神様の守護が得られるようにと、この鐘を寄進したのである。現在、鐘楼の横の建物に風雨から守るように納められている。